

現代日本政治の確立のために

A. われわれの主体的な位置の確定

の現代国際階級戦争の性格

の60年代階級戦争とわれわれ

① 50年代と60年代階級戦争の特徴（略）

② 現代の自然発生性の質

50年代後半のハンブリー事件、日露国境戦争、対露帝国主義世界体制の動産を要件に形成されたに由来する新左翼は、60年代の「ナチ」革命戦争における米帝の敗北とその一元支配体制の根底的動産の中で世界史的な同時性・国際性をもって、一つの革命潮流として政治的に定着した。こうした世界史的連関の中で日本の革命的左翼を位置づけるならば、全伴とてますは、反スターリニズムの自然発生性として登場したのである。だが、60年代に至って、日露国境戦争の敗北を越えた展開（その内奥として）、侵略的帝国体制の再編、国内社会再編と能力形態のなしくずし的転換等を要材として、不断に反戦・反暴力の自然発生性を確立していくのである。現代過程期世界の自然発生性の特質は ① 直接政治斗争過程に登場してくる限りにおいて攻撃的であり、② シー・シーがシカ、③ 組合主義的政治は、現在では、不断に帝国主義的内外組合、人民戦線系、革命的左翼に分解され、社会の累化とせし、それ自身としての存在意義を失いつつあること、従って現在の自然発生性の質は、最初から組合主義の枠を破って登場してくること（全伴）、反戦・理論的には「中野からのソートM」として特徴づけられる。③「口頭を越える革命」を要因する世界性と階級戦争への自然発生性として存在すること（108以降の長期に渡る武装斗争の持続）、④ 当初の反ス又意識の延長としての組織否定、無政府主義にある。総伴として無政府主義と特徴づけられる現在の自然発生性び「目的意識性への萌芽」としてわれわれの眼前に浮かびあがっていると同時に、そうした大衆を革命勢力へと誘集しておくためには、何よりも我々の政治的結集と自然発生性に伴随する部分との確固した斗争を推し進めなければならぬ。

現在「二」の形式的自然発生性は、基本的には三つの形態をとって現われている。すなわち、反帝反ソ

タ、ミテ軍主義、無政府主義がそれである。われわれが注目して見るならば、60年代において、反帝斗争として結合していったこの三者が、今や世界戦略を射程に収めつつある位置に達することにより、当面の70年代戦略から革命論に至るまでの体系的な考察の時代に入らざるを得ないことになるのである。

海外革命論に基づき、反帝・反ソを戦略化して左翼陣営の革命戦略へと帰着する華中核系、周山革命戦略を軸に、無抵抗に日露国境戦争との合流へと帰着せざるを得ないM系、これら両派系がめまれる戦略を批判し、自然発生性の両極として存在する両派との接近・戦争の中でわれわれを止揚すること故に総伴としての無政府主義を克服するべきであるのである。次に現在歴史的に形成されつつある無政府主義は、まさに戦術上の左右を問わず、またしく、日和皇主義として登場しているのである。（情愛、ハルチウ、和政諸派は三つの形態をとりて現われている自然発生性の中で前後左右に動揺せざるを得ない。その意味では過程的發展でしかない。わが陣営から輩出した赤軍系は、理論的には反帝反ソ主義とモロ重主義を融合せんとしたが、同じ「同時革命戦略」レベルを越えてはいない、無政府主義の無政府主義に直接応戦し、戦術的エスカレートで競合しようとして敗北し自ら現代無政府主義の光輝に墮したものである。（二）のことは何よりも我々の「世界革命戦線」の組織的位置づけの中に明白に表わされている。

70年代階級戦争の新たなウインドを叩きつつある現在、各派系はその戦略を固めていくがますます反ソ・タニを越えて絶えず觀念的左翼へと傾きつつある華中核系、大衆の即目的反ソ意識を降参し小至し急進主義へと転落した中核系、周山革命論の破綻を論議せんとして右旋回した中核系、この諸派にますます自らを絶たしつつあるM系、これらの自然発生性へ伴随する両派との斗争において誰一かれらを排除し擯しつつある立場を「世界も口無

B. 網領的視点の確立のために

① 領域の確定

① 現代過渡期世界の前行党の網領は、ドイツ社会党の
「エルフルト綱領」から「レーニ」に継承された「最大限網領
―最小限網領」という相違を認めるものではない。何故な
ら、第一に、現代革命は樹立すべき権力を「世界口独
として指定しないからであり、第二に、その主体
は「世界党―世界赤軍」であり、従って第三に、網領は
「世界網領」として確定できないのである。しかも
第四に、そのした根底には、階級斗争の真実、権力奪取
によって行われるだけでなく共産主義を組織することを要
求しているからである。

② 「現代過渡期世界論」を現代世界の科学的総体認識
の方法的基礎にし、それを更に具体的に権力分析、階級
分析にまで体系的に上向し「戦略―戦術―組織―理論の展
開基軸」にする。

③ 「世界網領」獲得に至るまでの組織的準備過程（ツ
インメルワルド左派の結集とそれを媒介にした日内的
日内的発展斗争の過程）におけるわれわれの理論構築は
① 革命観② 共産主義 ③ 戦略論 ④ 運動、組織論 ⑤
革命論の構築と、⑥ 「過渡期世界論」を基軸とした権力
斗争論、として展開される。「世界網領」は①②③④⑤の
一部を含んだものとして考えられる。何故なら、①は「
世界口独」世界社会主義」「世界過渡期」の戦略的指定
を含むものと考えられ、②については、「世界口独」
の主体的組織「世界党―世界単一共和制国家―世界赤軍
の相違と任務を指定する部分を含むからである。

④ ①②③④⑤⑥は、「世界口独」世界社会主義」「世界共産主
義」の科学的概念規定の問題をとり扱う。

⑥ 世界口独、について

⑥ 世界同時革命によって樹立される世界口独から世
界社会主義社会に至る段階を世界過渡期と規定する。「こ
れはマルクスが「ゴータ綱領批判」で述べている政治上
の過渡期に照応する。資本主義社会と共産主義社会との
あいだには、前者の後者への革命的転化の時期を横たわ
っている。それに照応するものはまた政治上の過渡期で
あって、その国家は「口独」である。この革命的独裁は他
ならない。（『選集』、p. 434）

「口独」に関するマルクスの言及箇所

「の革命的社會主義の主張するところは、革命の系統
宣言であり、革命の階級的独裁である。―即ち、階
級の区別一般の廃止、階級の区別の基となる現在の
現在の全生産関係の廃止、これらの生産関係に
現在の全生産関係の廃止、およびこれらの生産関係
から発生するすべての観念の变革のための、必然的な
過渡期としての「口独」の階級的独裁である」
（マルクス・エンゲルス『共産主義宣言』）
「口独」は僕自身についていえば、近頃会における諸
階級の存在を発見したことも、それの階級相互間の
斗争を発見したことも、僕自身のものではな。市
民的歴史家たちは、僕よりもずっと前に「この階級斗
争の歴史的發展を、そして市民階級斗争は、諸階級
の生産上の解部をのべていた。彼等がたにたこと
といえは、次のことを証明したものである。諸階級
の存在はひとに生産の特定の歴史的段階をもた
びついているということ。諸階級はみな互に「口独」
タリヤーの独裁をまうということ。④「口独」を
のものは、いっさいの級の場棄と無階級社会とい
たる過渡をなすにすぎないということ。……」
（同右 p. 434）

このマルクスによ、二重して提起されている「口独」
（一部、マルクス文の中では、口独論をマル
クスの「系統革命論」部に含め、後期では変更された
とする説があるが、この誤った解釈である）は四人
会において世界口独―世界社会主義―世界共産主義
論として展開し、⑥論文の世界革命戦争「世界―世
界赤軍―世界反帝統一戦線」と同じせて、現代革命の
基本問題、我々の立場を鮮明にしたのである。

② 田代健一は、「この世界口独―世界社会主義の過
程に、具体的相違の鮮明な接近するところによって、
階級規定の存在に意味をもち、この結果をもたした。

③ 現代過渡期世界からマルクス・エンゲルスが自らを「口独」
権力として組織することのなくなった段階を、世界口
独樹立と考える。但し、エンゲルスは政治権力は
「この世界過渡期に必要とするものである。従って、
世界過渡期においては、マルクス・エンゲルスの過渡期
タリニス打倒斗争が進行し、その結果として「世界

② 田原同志は、この世界は口独一世界社会主義の過程に、具體的构造の解明から接近することによつて段階規定と逆に曖昧にするという結果を齎した。

③ 現代過渡期世界からマルショアシーが自らを
「國家」として糾結することのなくなった段階を
世界は「独樹立」と考へる。但し、スターリニスト
政治権力はこの世界過渡期にも残存すると考へら
れる。従つて世界過渡期においては、マルショア
シーの追討戦、スターリニスト打倒斗争進行中、
その絶滅までは「世界革命」が持續する。目
下同志は、その時点をメルクマールと云ふ「世
界的な独樹立」と「世界は独樹立」を区別する
が、その内容においては相異がない限りにおいて余
り大した問題ではない。世界過渡期の基本的特質
は、スターリニスト政治権力を含め追討戦とい
ふ意味での階級斗争の存続と統一共和制國家を媒介
にした世界統一世界赤軍を主体とする世界社会主
義建設である。

④、戰略論レベルの問題とは、むしろ「世界党」世界赤軍に建設の時期と、世界過渡期における世界は口独國家の改造を「單一共和制」と捉えるか「連邦も單一共和制」と捉えるかの問題である。前者の問題については、帝國主義列強同時打倒（論理的に）の以前において組織されていなくてはならない。

何故ならオ一に、現代過渡期世界の階級斗争は、「世界性」としてその實を表現していることにより、世界革命の初期的段階にすてに「世界統一世界赤軍」を形成する物的基盤が存在すること、オ二に、帝因主義軍、スターリンの革命戦争の遂行過程における、その勝利は、世界統一政治指導部（世界党）を又つてはありえないからである。日同同志は、この問題にははっきりと断言しているが「二は（日本）を突破口とする永続的世界革命戦争」として党主体の未形成の故に、さうあたり「日本一國は口根への成立を考へ、その過程における「世界統一建設」という把え方は、世界党はむしろ荒誕性として考えられる傾向が強く、少なくとも「世界統一建設の基軸にはなっていないと考えられる。「フルンゲン」に対する口根の斗争の斗争は、

内容上ではないが形式上は何れもオーストリアに國民的斗争である(可宣言)は、本質的規定としては正しく、
 われわれにとつても「自由帝國主義打倒」を公認し、
 直接、現存する階級者國家に民族根拠地を求めた赤軍
 派の、民族派斗争抜きのプロ、スラを批判するのは
 あるが、しかし同時に、マルクス段階と現代過渡期世
 界においては、階級形成の環が決定的に異なる、ことに
 注目しなければならない。即ち、現代過渡期世界にお
 いてはオーストリアに、階級斗争が、帝國主義の侵略・反革命
 との攻前として、武装・軍事を軸に展開されること、
 オーストリアに、右進派における環境をこえる實體的形成・消
 滅に、侵略・反革命同盟と民族管理通貨制とをこの帝
 國主義世界体制は、危機の同時性、世界を生み出す相
 違をもつていること等々、要するに、プロレタリア
 トが「世界プロレタリアに自らの根拠をおくに至るまで階級
 的に成熟していること、その階級形成の環にまこと
 く「武装斗争」をおくに至っていることが、マルクス
 の階級段階と決定的に異なるのである。日何同志も言
 う通り、マルクスの「恐慌と内乱」は、彼々の「侵略・反革
 命戦争と内戦」世界革命戦争」という戦略は、資本論
 と帝國主義論と過渡期世界論に論理的基盤をおき、全
 く何相の相異するものに他ならない。従つて「打倒」
 されるべきブルジョア政治権力が「目的」として成立し
 ていないから、樹立されるプロレタリア権力も形式上
 は「目的」なものとして成立しえない(「日何同志論」)
 線(「号山」)ということは、アウリオリに前提でさな
 い。ましてや彼自身「臨時革命政府宣言」で内戦と世界
 革命戦争と武装蜂起と権力奪取(日本革命とニエーマ
 化と、そこでの内戦の過程における赤軍の保衛の介入と
 戦争の長期化を予想する)とすれば、決して前述の
 ような断言はできないはずである。このことは更に「
 連邦制と共和制」とで武化した「世界プロレタリア形態

③貨幣について

まず日同同志の見解を紹介する。

この過程にあつては未だ貨幣が存在し、従つて商品の価値を他の商品の使用価値で表現する形態は残存している。それ故、この一般的等価物の残存に媒介されて抽象的労働そのものと、その量を時間ではなく貨幣へ換算し、それを交換の尺度として用いることになる。と同時に（二）ここでは小商品生産者や手工業者が未だ残存し、それ等が個人的労働の生産物をこの貨幣と云う一般的等価物と私的に交換しつづけることにより、価値関係は未だ一切便用されないことになる。（同上p.62）

表現がきつめて曖昧なので、ここではいくつ々の問題点のみを指摘して置く。オ一に「と同時に（二）では」の前後の關係は「さりしない、単なる並列」なのか、どちらが規定なのか、小商品生産者や手工業者が「残存する」としても、それらが社会的な關係とはなく、むしろ一部であるが故に、この段階における經濟過程の規定要因ではない。だからそれらの存在によつて「価値關係が止揚されない」という表現は曖昧である。オ二に「抽象的労働そのものも、その量を時間ではなく貨幣へ換算し……」と云う表現は意味がわからない。（「抽象的労働力」「抽象的人間労働？」）彼は「抽象的人間労働を何か実体として受けとっているのではないか。例えば「……人間労働は価値を形成するのではあるが価値ではない。それは凝固した状態です、なれど対象的な形態で価値となる」（Karl Marx, 第一章p.50）を引用して「それ故、抽象的人間労働の対象的な形態は価値だ」と言う歪曲を行う。二に明確に示されているように「交換と分配」を軸とする価値形態論的にのみ一面化した把握の仕方に向題があるのではない。要するに我々は、世界史過程における經濟的性質を考察する場合に、単に価値形態論的把握はその一面に止まらず、むしろ問題にあくまで生産諸条件——労働諸条件の分配にあるし、総じて労働がどのように組織化されるのかにあるのだと考へる。

72 古野社会主義

④ 古野社会主義の思想的基盤については「価値」の把持が根本である。「価値」はその商品について整理してある。⑤ 価値とは次のように述べている。

「そして古野社会主義に於いては、この価値は先天的にもたれらる抽象的価値は残る」(同上p.62)「……」これは⑥ 労働時間と生産者の共同労働に對する、すなわち共同生産物中の個人的に消上されるべき部分に對する個人的労働の尺度と成つており、⑦ 個人的労働と財以外物も個人の所有にはいへないの、個人的労働生産物と社会的共同生産物とをこゝに存在せず、⑧ 個人はそれに対して労働量に於いて「分配」を受けるという関係にはいるが、個人的労働の生産物を「交換」とするといふ関係にはいり、之を従つて「同等的労働の対等化」といふ価値を生み出すわけにないのである」(同上p.63)

(イ) 先に述べた様に「抽象的個人労働が残る」というのは、「人間的労働の三重性」が残るといつべきであるが、その意味はあくとして、「人間的労働の対等化」は「い」ということは、労働生産物が「い」ということと等しいのであり、余りに複雑であると云ふればならぬ。

(ロ) 日回同志の価値の把持は「価値」商品交換に於ける商品価値であり、従つて私的商品の交換が基礎となると価値そのものを残す、といふことになる。だから古野社会主義に於いては価値が先天的であるから価値規定性も當然ありえないといふことになる。はたしてどうなるか。

(ハ) これは空の私蔵の価値説を採用したものであり従つて空の空に引用するといふは我々の注意を引くべきであらう。価値の主体としての労働者一般のいかなる社会にも共通は制約するにすぎないといふこともこの制約自体は、商品生産の発展によつてはじめて明らかになるという事である。……しかし、このこととから、空の如き抽象的・社会的労働は常に価値を形成するといふことはできない。だから労働者の価値を形成するのは商品に於いてであつて生産物一般に於いてではない。生産物が商品となることによつてな

かる労働も価値を形成する労働となるのである」(空の「価値」p.60)

この前半部分はマルクスの言う通り正しい。だが後半は明らかにマルクスの論理を曲解である。

「相互に成立して居る、くなく社会的労働の自然な生産の環として相互に全面的に交渉しあつて、この私的労働はたゞその社会的・社会的な尺度に還元される」たゞ「偶然」のうちに消滅して、この私的労働の生産物の交換関係に於いては、その生産のため社会的に必要労働時間、規則的・自然的な労働時間として量的に目口を算するから——といふ社会的な労働を基礎とするから生ずるためには、その前に完全に消滅した労働生産物である。だから、労働時間による価値の大きさの規定へ即ち価値規定——筆者注——は相対的な商品価値の現象的運動の自由になく、これは必然である」(空の「価値」p.61)

「彼らは、彼らの相違する種類の諸生産物を交換に於いて価値として相互に立置することによつて、彼らの相違する諸労働を人間的労働として相互に立置する。彼らは、それを意識してはいないが、そうするのである。」(同上p.61)

要するに価値は消滅した商品交換社会において、一般労働形態・労働という形態をとることによつてはじめて社会的に立置することが可能となるのである。……「価値」そのものは社会的労働・社会的必要労働の自然な交換関係、従つて社会的労働の交換にすぎないであつて、決して商品交換に於いては無いのである。

(ニ) 日回同志の依頼して、空の価値説の本質は上の点にあった。ところがマルクスは社会主義の共産主義の第一原則の生産物の規定性について次のように云つてゐる。「……」これは明らかに、商品交換が価値である限り、この交換を支配するのと同じ原則が支配してゐる。内容と形式はわかつてゐる。……「個人的労働が、何の生産者の間に分配されることについては、商品の等価交換の原則と同じ原則が支配し、一つの形の労働者価値の同量の労働と交換される。……」空の「価値」は、このことは依然として原則に於いてマルクスの権利である。

